

逆接の意味関係で接続する「そうで」「ように」

江 口 匠

論文要旨

従来、多くの辞典類・研究書で連用形中止法に逆接の用法はないと言及されてきたが、連用形と規定できる「そうで」「ように」には、逆接の意味関係で主節に接続する例が散見される。この二者をテ形と規定する研究書もあるが、これらに注目した研究は未だ見られないため、テ形の範疇から「そうで」「ように」を取り出して一つの接続形式として提示し、二者の逆接用法について詳述するのが本稿の目的である。

その結果、「そうで」には3つ、「ように」には4つの逆接用法の下位分類があることがわかった。①「X [そ／よ] うで not X」あるいは「not X [そ／よ] うで X」構文で表され、Xに同じ述語が用いられ、否定を表す表現がいずれかの節に用いられるパターン、②「X [そ／よ] うで [Xの対義語]」構文で表され、節と節の述語が対義語であるパターン、③「X [そ／よ] うで Y」のような、従属節と主節の述語同士に語義的関連性がないパターン、④「Xするようで Xされる」あるいは「Xされるようで Xする」構文で表され、Xに同じ述語が用いられ、前件動詞と後件動詞とでヴォイスが異なっているパターンが考えられる。

[キーワード：①連用形中止法（第一なかどめ） ②テ形中止法（第二なかどめ）
③逆接 ④「そくだ」 ⑤「ようだ」]

1. はじめに

本稿では、逆接の研究の一環として、助詞「て」の逆接用法¹⁾（江口 2016 予定稿参照）の1つと見なせる「そうで」「ように」について考察する。

活用語の連用形や接続助詞「て」²⁾で節同士を結ぶ接続法は、「中止法」あるいは「なかどめ」と名付けられている。連用形による接続法は連用形中止法（第一なかどめ）、連用形+助詞「て」による接続法はテ形中止法（第二なかどめ）とも呼ばれている。一般的に、前者には逆接用法はないとされ、後者は逆接用法の存在が指摘されている程度

である³⁾。

これらの先行研究として、日本語記述文法研究会編（2008）『現代日本語文法 6 第11部複文』（以下、『複文』と略記する）が挙げられる。『複文』では、中止法について「逆接や順接条件を表す場合は、テ形のみ用いられ、連用形は現れない」（p.288より）。下線は本稿執筆者による）と指摘されている。一方で、逆接用法に関しては「テ形が多く、連用形には少ない」（p.286より。下線は本稿執筆者による）と記載されており、中止法で逆接を表す場合について一貫した記述がなされていない。これは活用分類、すなわち、形態論的な立場にも影響されるが、矛盾した指摘が併存しているのは問題である。

上記の問題に関わるものとして、逆接用法のテ形として『複文』に挙げられていた以下の用例が注目される（下線は本稿執筆者による。一重下線：連用形中止法の従属節、波線：一重下線部にとっての主節。以下、特に注記がない限り、例文は全てこれに従う）。

（1）「中学入試の問題は簡単そうで、なかなか解けない」（『複文』 p.163より）

（1）の従属節述部である「簡単そうで」は、助動詞ソウダ、あるいは、名詞述語（を形成する指定辞ダ）の連用形と捉える立場も考えられる。助動詞ソウダの活用語尾（あるいは名詞述語を形成する指定辞ダの活用形）である「で」をテ形とするか連用形とするかは、拠って立つ文法論に応じて是非が分かれるだろう。

この「そうで」を仮に連用形と規定すれば、（1）のように連用形中止法には逆接用法があることが実証でき、先行研究の誤りを指摘できる。また、テ形と規定したとしても、テ形という範疇から「そうで」を取り出して、その逆接用法を分析・考察する余地は十分に残されている⁴⁾だろう。したがって、活用分類の立て方はどうであれ、この「そうで」を一つの接続形式として焦点を当てて分析することには多分に意味があると考えられる。

そこで本稿では、主要な辞典類や研究書の複文・接続法に関連する項目においてほとんど挙がっていない「そうで」と、それと意味的に関連性があると思われる「ようで」の2形式を取り上げ、それらに存在するいくつかの用法について実例を挙げながら記述していく。

2. 先行研究

1章で既に概略を述べたが、「そうで」に関しては『複文』において逆接用法の存在が指摘されており、それは前掲の例（1）を見れば明らかである。ただし、『複文』ではテ形中止法の逆接用法に（1）のような例があることを指摘しただけで、「そうで」に注目した分析は行っておらず、類義形式「ようで」についても言及はない。

また、「そうで」「ようで」を連用形中止法として考えたとしても、多くの辞典類・研

究書では逆接用法は存在しないと指摘するか、そもそも逆接用法に関して言及しないかである。本稿執筆者が知る主要な辞典類『日本文法大辞典』『国語学大辞典』『基礎日本語辞典』『日本語文法大辞典』『日本語表現・文型事典』『新版 日本語教育事典』『日本語類義表現使い分け辞典』『助詞・助動詞の辞典』『日本語文章・文体・表現事典』『日本語文法事典』『日本語大事典』（刊行年順に列挙）の全項目を確認したが、連用形中止法が関連する項目において逆接の用例は挙がっておらず、逆接に関係する項目にも連用形中止法に関する記述は見られない。

唯一「ようで」の逆接用法について言及があったのが、白石大二編（1984）『新文章辞典』である。p.586に以下の指摘がなされている（下線は本稿執筆者による）。

順接と逆接—普通の例からすれば順接の言い方であるのに、前後関係からは逆接と考えられるものがある。次は、助動詞「ようだ」の連用形の例である。ヨウデアッテ→ヨウナノニ

ぬかみそといえば、同じようで、それぞれの家の工夫、手のかけ方が微妙な違いをうみ出す。
（朝日新聞「天声人語」、昭和五九・六・七）

『新文章辞典』では「ようで」しか挙がっていないが、明確に「連用形」の例で「逆接用法」を指摘している唯一の先行研究といえる。しかし、「ようで」と意味的に関連性の高い「そうで」には言及していない。また、例文は「ようで」だが、解説は「ヨウデアッテ→ヨウナノニ」としていることも注目値する。この記述から鑑みるに、白石（1984）は「ようで」を「ようであって」の短縮・省略形と捉えているとも考えられる。

以上、2つの先行研究を紹介したが、いずれも中止法に逆接の用法があることを指摘するに留まっており、「そうで」「ようで」という一つの表現形式としての詳細な分析はなされていない。

3. 例文の出典について

本稿では近・現代語の実例をもとに分析・考察を進めていく。実例の収集にあたっては、『青空文庫全』に所収されている約 6300 件の文学作品の日本語表現の用例を検索できる「日本語用例検索」⁵⁾を使用した。作成者の田野村忠温の解説によると「検索対象とするデータは粗い機械処理によって生成しており、テキストの内容、著者名、作品名が誤りを含む場合があります」、「論文などへの引用時には書籍ないし青空文庫のサイトでの確認が必要」であるため、検索された用例を改めて「青空文庫」からコピー＆ペーストし、フリガナを取り除いた。

また、「日本語用例検索」で実例がほとんど抽出できなかった場合、実例が出てくるかどうかの確認として、その他のコーパスを補助的に用いたことを先に断っておく。

4. 逆接を表す「そうで」類

まずは、「そうで」による従属節（以下、ソウデ節と略記する）から見ていく。なお、逆接として接続する「そうで」は、連用形に承接する助動詞「そうだ」の連用形であり、終止形接続の「そうで」は伝聞の意のみであり、逆接用法は存在しない。

また「そうで」に関しては、基本となるソウデ節以外にも2つの派生形式があると考えられる。一つは「そうでいて」、もう一つは「そうであって」である。そのため、本章では「そうで」「そうでいて」「そうであって」の3形式を取り上げることになる。

4.1 ソウデ節の3分類

ソウデ節と主節同士の意味関係が逆接と捉えられるのは前掲の例(1)で見てきた通りだが、その逆接には異なるタイプがあることは言及されていない。そこで、この節ではソウデ節と主節の間における逆接の意味関係を3分類し、それぞれ実例を挙げて記述していく。

概略としては、①「X そうで not X である」あるいは「not X そうで X である」構文で表され、X に同じ述語が用いられ、なおかつソウデ節か主節に否定を表す表現が用いられるパターン、②「X そうで [X の対義語] である」構文で表され、節と節の述語が対義語の関係にあるパターン、③「X そうで Y である」のような、ソウデ節と主節の述語同士に語義的関連性がなく、構文として表しにくいパターンである。この③の用法では、従属節事態が成立要因となって予測される帰結と相反する事態が主節に表される。次節で①②のような構文化できるパターンを取り上げ、次々節では③のような構文として表せないパターンについて詳述する。

4.1.1 逆接を表すソウデ節の構文

まず、①「X そうで not X である」あるいは「not X そうで X である」構文と、②「X そうで [X の対義語] である」構文について述べる。①の例を(2)、②を(3)として挙げる。

- (2) 「ところで、あんまり、のろくさい旅ですから、何か一つ、いたずらをして上げようと思って、すきをねらってみるにはみましたが、すきがありそうで、その実、少しもすきがないのには驚きましたよ」

(中里介山『大菩薩峠 27 めいろうの巻』)

- (3) そうだとすると、結局、なるべくうまい上等の御馳走を少し喰っているのが一番の長寿法だということになるかもしれない。これはやさしそうでなかなか六かしいことらしい。

(寺田寅彦『変った話』)

上記2例の「そうで」の活用語尾「で」（以下、助動詞の活用語尾「で」は「で」と略記する）は、どれも逆接を表す形式「だが・だけれど」に置き換えても意味が通じる。しかし、逆接と解釈できる所以は異なる。

(2)の用法では、いずれかの節の述語に否定を表す語がつく。否定の意味を表してさえないればいいので、「ない」「ぬ」「ず」などの打消の助動詞⁶⁾がついたり、述語が漢語であれば否定の接頭辞「非」「不」「未」「無」がついたりする。構文的に表せば「X そうで not X である」あるいは「not X そうで X である」となる。

一方(3)は、ソウデ節述語の対義語が主節述語として用いられるパターンである。このパターンは、意味・機能的には(2)と重なるものである。(2)の構文では否定を表す語を要求して打消関係を示しているが、(3)ではその代わりに対義語を要求して対立関係を示しているのである。言い換えれば、「X そうで [X の対義語] である」という公式で表せる。

4.1.2 構文化しにくいソウデ節

上記二者とは異なるパターン——従属節と主節の述語同士に語義的関連性がなく、従属節事態が成立要因となって予測される帰結と相反する事態が主節に表されるパターン——が(4)～(7)のような例に見られるソウデ節である。以下に例を掲げる。

- (4) 作者がある意味で話し上手で、楽な印象を与えるから、壺井さんの作品をよむと成程自分もこんな風にすらすら話して行けばいいのだと思えるかもしれないけれど、強ち誰にでもああ書けるものではない。模倣されそうで案外それはむずかしい。壺井さんは十年も前から折々小説を書いて来ていて、自分のあの物語りかたを見出しているのである。

(宮本百合子『『暦』とその作者』)

- (5) 何と云っていいか分らないが、妙にきらきら明るくていて、それで陰気なおどろおどろしい景色である。dismal とか weird とか何かしらそんな言葉で、もっと適切な形容詞がありそうで想い出せない。(寺田寅彦『雑記(1)』)
- (6) 「どうも、いけねえ、やれそうでやれねえ、見ているとこのくらいやれそうで、やってみるといよいよむずかしい」と言いながら、(後略)

(中里介山『大菩薩峠 34 不破の関の巻』)

- (7) 大勢の女ばかり多い貴族的で有閑的な、つまり気力の乏しい家族にとりかこまれ、一見賑やかそうで実は孤独であったマリアは、よろこびも悲しみも、すべてを日記の中に吐露し、それを正確に吐露することで、一步一步と進み出て行っている。(宮本百合子『マリア・バシュキルツェフの日記』)

(4)のソウデ節述部「模倣されそう」と主節述語「むずかしい」、(5)の「ありそう」と「想い出せない」、(6)の「やれそう」と「むずかしい」、(7)の「賑やかそう」と「孤独である」は、いずれも語義的に関連性が確認できず、述語同士に打消関係や対立関係は見られない。では、何が逆接の解釈をもたらすかという、従属節事態と主節事態の因果関係である。

(4)を例に分析すると「模倣されそう」な書き方であれば、その書き方は「むずかしくない」はずである。「模倣する」のが難しい行為であれば、「模倣」という事態の成立も難しくなるのだから、一般的に考えて「模倣されそう」なことは「むずかしくない」となるわけである。同様に、(5)では「ありそう」→「想い出せる」、(6)では「やれそう」→「むずかしくない」、(7)では「賑やかそう」→「孤独ではない」というように、ソウデ節事態から予測できる何らかの帰結が、話者の心的世界において描かれているということである。

しかし、(4)で表現された実際の主節事態は「やさしい」と反対の意味を表す「むずかしい」である。つまり、予測される帰結と反対の事態「むずかしい」が表現されているのである。同様に、(5)(6)(7)も予測される帰結と相反する逆の事態が主節で表現されている。すなわち、このようなパターンでは、従属節事態から予測される帰結を裏切った事態が主節に表現されることが、逆接らしさを表出しているのである。これは、ソウデ節が成立条件となって予測される事態と相反する逆の帰結がなされている用法とも言い換えられ、いわゆる逆接条件表現と同義だと考えられる。図式化すると以下のようにまとめられるだろう。

表 1：逆接条件表現が逆接として解釈されるまでの過程

構造	従属節事態	→ 順	予測の主節事態	⇔ 逆	(実際の) 主節事態
	予測帰結の成立要因		予測の帰結		実際の帰結
例	やれそう		むずかしくない		むずかしい

とはいえ、このパターンの実例はほとんど検索されず、上記の 4 例だけである。現段階で本稿執筆者が見出した逆接用法の「そうで」の実例は 25 例であるが、その中の 4 例では 2 割程度なので相当に少ないといえるだろう。

また、「実は」「その実」「案外」「意外」「なかなか」「やっぱり」などの予測を裏切る、つまり、反対の事態を導いたり、否定表現と呼応したりする副詞が「そうで」に後接していると、より逆接らしさが明示的になる。それは(2)(3)(4)(7)の例文を見ても明らかであろう。

4.2 逆接を表すソウデイテ節

従属節が「そうで」ではなく「そうでいて」であれば、逆接の意味関係がより明示的になる。以下に、4.1節で述べた①のパターンを(8)、②のパターンを(9)、③のパターンを(10)として、それぞれ用例を掲げる。

- (8) 又も戦争の噂。実に煮え切らないポリネシア的な紛争だ。燃えそうでいて燃えず、消えかかっていて、猶、くすぶっている。今度も、ツツイラの西部で酋長等の間に小競合があったばかりだから、大した事はなかるう。

(中島敦『光と風と夢』)

- (9) 永遠に失われざる青春、七十になっても現実の奇蹟を追うてさまようなどとは、毒々しくて厭だとも考える。甘くなさそうでいて、何より甘く、深刻そうでいて何より浅薄でもあるわけだ。

(坂口安吾『青春論』)

- (10) 「灰皿の中に、燐寸の軸と煙草の灰が入っているのに不思議はないが、もう一つ必ず有りそうでいてあの灰皿には見当らないものがあるのだ」と帆村は云ってちょっと口を噤んだ。

「それは何かというと吸殻が一つも転っていないのだ。灰の分量から考えると、すくなくとも十五六個の吸殻がある筈と思うのだが、一個も見当らないのだ。これは大変面白いことだ」

(海野十三『ゴールデン・バット事件』)

意味的な差は「そうで」と「そうでいて」はほとんど変わらないが、「そうでいて」従属節（以下、ソウデイテ節と略記する）は、検索された実例 15 件の全てが逆接と解釈できるという点でソウデ節と異なる。したがって、テイテ形式をとると逆接としての意味関係が明示的になるともいえる。

4.3 ソウデアッテ節について

「そうで」あるいは「そうでいて」で結ばれた節同士の意味関係が逆接である場合、異なる 3 用法があることは前述の通りである。では「そうであって」はどうだろうか。実例を収集した結果、「活用語の連用形+そうであって」（以下、ソウデアッテと略記する）は「日本語用例検索」において 3 件しか現れなかった。他の実例を収集するために、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』「少納言」⁷⁾ や、朝日新聞の記事データベース「聞蔵Ⅱ」⁸⁾、毎日新聞の記事データベース「毎索」⁹⁾、読売新聞の記事データベース「ヨミダス歴史館」¹⁰⁾ にて「そうであって」で検索したが、4 つ全てで観察されなかった。したがって、ソウデアッテは標準的な表現形式と認定しがたいと推察される。以下に、観察された用例 3 件全てを掲げる。

- (11) 当時、歌人として地位を確立していた与謝野晶子が、今日からみるとその人の temperament にふさわしいとも思えない堅い論文調で、社会時評を盛に執筆していた。それまで『青鞥』の人々が、刻々の時にふれた時評をしそうであってそれをしなかったことは、彼女たちの社会的な成長の程度をも反映して興味ある事実であるが、晶子が選挙運動に婦人の活動することによって書いた文章に対し伊藤野枝が、(後略) (宮本百合子『婦人と文学』)
- (12) …(前略)田圃の不動堂が、延宝の昔以来の姿をとどめていた頃の事であるから、数奇を凝らした尾彦楼の寮でさえも、鳥渡見だけだと、何処からか花鋏の音でも聴えて来そうであって……、如何さま富有な植木屋が朝顔作りとしか、思われない。(小栗虫太郎『絶景万国博覧会』)
- (13) けれども、それとはどこか異なった感じで、同じ冷たさにしても、生きた魚の皮膚に触れるといったような、なんとなくこの一劃の空気から、微かな動悸でも聴えてきそうであって、まあ云わば、生体組織を操縦している、不思議の力があるのを浸々と感ずるのだった。(小栗虫太郎『黒死館殺人事件』)

(11)は逆接の用法であろう。「与謝野晶子」≡「『青鞥』の人々」は当時、「社会時評を盛に執筆していた」のだから、「刻々の時にふれた時評をしそう」だと予測される。しかし、実際は時評をしなかったのである。このような事態の生起過程は、「そうで」「そうでいて」の逆接の構文パターン①「X しそうで not X」と重なる。

一方、(12)はソウデアッテ節に対応する主節と断定できる節が存在しないように見える。これは言いさし表現であろうか。また、(13)は「微かな動悸でも聴えてきそうであって」を説明した節が、「生体組織を操縦している、不思議の力があるのを浸々と感ずるのだった」であろう。この場合、接続機能を担っているのはソウデアッテなのか、「云わば」なのか、両方なのかははっきりしないが、意味関係を表示しているのは換言を意味する「云わば」であろう。

いずれにせよ、「そうであって」という表現形式は一般的に用いられないことは明らかであり、逆接用法も辛うじて上記の(11)の1例が確認できるのみである。

5. 逆接を表す「ようで」類

次に「ようで」について見ていく。前章の「そうで」類と同じように、「ようで」従属節(以下、ヨウデ節と略記する)と主節との間で逆接の関係を表す事例を挙げ、その接続関係が逆接と解釈できる所以や構文的な型を記述していく。また、「ようで」類にも「ようでいて」「ようであって」という派生形式が存在する。

5.1 ヨウデ節の4分類

ヨウデ節はソウデ節とかなりの部分が類似しているが、異なる点がある。それは、ヨウデ節はソウデ節では表せない構文が1つあることである。

ヨウデ節に関しては4つの下位分類を指摘するが、概略としては、①「X ようで not X である」あるいは「not X ようで X である」構文で表され、X に同じ述語が用いられ、なおかつヨウデ節が主節に否定を表す表現が用いられるパターン、②「X ようで [X の対義語] である」構文で表され、節と節の述語が対義語の関係にあるパターン、③「X ようで Y である」のような、従属節と主節の述語同士に語義的関連性がなく、構文として表しにくいパターン、④「X するようで X される」あるいは「X されるようで X する」¹¹⁾ 構文で表され、X に同じ述語が用いられかつ、従属節と主節とでヴォイスが異なるパターンの4つである。「ようで」には④のパターンが増えているという点で、「そうで」よりも用法が多い。以下に、①～③の実例を掲げる。

- (14) 次に「空」ということばであります、これがまた実に厄介な語で、わかったようにわからぬ、わからぬようでわかっている語であります。

(①のパターン) (高神覚昇『般若心経講義』)

- (15) 都の姫の事は、子古の口から聴いて知ったし、又、京・難波の間を往来する頻繁な公私の使いに、文をことづてる事は易かったけれども、どう処置してよいか、途方に昏れた。ちょっと見は何でもない事の様で、実は重大な、家の大事である。

(②のパターン) (折口信夫『死者の書』)

- (16) 実の頼みは、茶話のようで、その実無理にも強いるような力を持っていた。

(③のパターン) (島崎藤村『家 1 (上巻)』)

- (17) 私は私と桃子がいう、その気持の内容がはっきりせず、謂わばそんなに手際よく自分だけ複雑な生活の中で別者のように云ってられる心持が多喜子には納得ゆかないのであった。桃子のそういう態度は大変怜悯なようで、その実自分の心持を見守る手数をどこかで省いているか、投げているかのように感じられるのである。

音楽も拔群であるし、絵をかかせればやはり目をひくだけの才気を示し、人の心の動きを理解する力も平凡ではないのに、桃子にはとことんの処へ行くとするって流れてしまうものがあつた。一本気なところのなさが、桃子のいろいろの才能をも、つまりはちゃんと実らせない原因のようであるし、多喜子はそのことをもやっぱり桃子の毎日の境遇とときはなして見ることは出来ないと思うのであつた。(③のパターン) (宮本百合子『二人いるとき』)

①②のパターンは構文的にはっきりしているため分かりやすいが、③のパターンは逆

接と解釈される要因が一目で分かりにくいので説明を加えておきたい。

(16)は「茶話のようだ」というヨウデ節事態から「気軽な話」とであると予測される。しかし、その予測を裏切って、実際は「無理にも強いるような力」を持った話であったことが主節に表現されている。(17)は「怜悯な」人間ならば、その「いろいろの才能」を「実らせ」られると予測されるが、実際は「一本気なところ」がなく、「いろいろの才能」を「ちゃんと実らせない」という、予測と食い違う帰結が主節で表現されている。

以上のように、「ようで」は「そうで」とほぼ同一の意味・機能を有していると思われ、逆接用法も近似した体系を有している。しかし、「ようで」は(14)のように、過去のテンスを表すタ形と共起できるため、「そうで」よりも多様な表現ができるといえる。

上記の例は「そうで」とほぼ同一の類型だったが、「そうで」には観察されなかった意味関係として以下の用例がある。前述の④「XするようでXされる」あるいは「XされるようでXする」構文で表され、Xに同じ述語が用いられかつ、従属節と主節とで能動か受動かという点でヴォイスが異なるパターンである。以下に、1例のみ見出せた実例を挙げる。

- (18) 今日の多くの人たちは、各自、お金を使っているようで、その実、お金に使われているのではないだろうか。

(④のパターン) (高神覚昇『般若心経講義』)

(18)の場合、ヴォイスが能動と受動とで異なっていることが、表現形式の上でも明らかである。従属節と主節の動詞述語には語義的に対立関係や打消関係は見られず、一見して逆接らしさは見られないが、逆接として解釈できる。その原因は、話者の考える社会通念と反しているからである。

一般的に考えて、「お金は（人が）使う」ものである。しかし、時に人は「お金に使われる」ことがある。「お金を使うことが何らかの手段となっている」限りは、「お金を使っている」と考えられるが、「お金を使うこと自体が目的となってしまう」場合がある。そのような人間は「自分の意志で」お金を使うのではなく、あたかも「お金の意志によって」お金を使うことを促されているかのような状態に陥る。このような、社会通念（＝常識）と異なる事態（＝お金に使われる）が主節において表現されている場合も逆接といえるだろう。つまり、「使っている」と「使われている」は、ヴォイスが異なることによって「意味が逆転」するために、「逆の意味」に読み取れることになるのである。

また、ソウデと同じように「実は」「その実」「案外」「意外」「なかなか」「やっぱり」などの副詞が後接したり（次節(19)～(21)参照）、従属節が「ようでいて」で表現されたりすることで逆接らしさが明示的になる。

5.2 ヨウデイト節について

次に、「ようでいて」従属節（以下、ヨウデイト節と略記）について述べていく。

- (19) これは甚だ自信たっぷりのようでいて、実は之ぐらい自信の欠けた生き方もなかろう。常に奇蹟を追いもとめるということは、（後略）

（①のパターン）（坂口安吾『青春論』）

- (20) 或る画面について、その形而下的な形態的な事柄は、誰にでもすぐに書けるようでいて、実はなかなか書けないのである。

（②のパターン）（豊島与志雄『形態について』）

- (21) 帆村は巧みに二人の姿を見失わないで、後からブラリブラリとついていった。その間にも彼は、池谷医師の連れの美人が誰の顔に似ているかを思い出そうと努めた。ところが、殆んど分っているようでいて、なかなか思い出せないのであった。丸顔の女を、何処で見たのだろう。

（③のパターン）（海野十三『蠅男』）

(21)のヨウデイト節の述部「殆んど分っている」と主節述部「なかなか思い出せない」は語義的に関連性がない。しかし、ヨウデイトをヨウナノニに置き換えても、意味に差異はないだろう。(21)のヨウデイト節が逆接として解釈できる理由は、「どこかで見たであろう丸顔の女」についてほとんど「分っている」ならば「思い出せる」という事態が生起すると話者は予測するのだが、実際は「なかなか思い出せない」という事態が結果として生起している。このように、予測を裏切った結果が生起していることが逆接と捉えられる所以である。

5.3 ヨウデアッテ節について

4.3節と同じように、「ようであって」従属節（以下、ヨウデアッテ節と略記）と主節との間における意味関係について記述していく。ヨウデアッテは、唯一の先行研究『新文章辞典』でヨウデと同一視されていた可能性がある表現形式である。ヨウデアッテは「日本語用例検索」で21件観察され、逆接用法だけでも9件あるため、ソウデアッテと比べても一般的な表現形式と考えられ、逆接の用法も稀ではない。以下に、逆接用法の用例を挙げる。

- (22) 生活の在りように対する関心では、この作品と読者の良心とが同一面に顔を合わせているかのようであって実は決してそうでないものが、「生活の探求」の底に埋められてあった。

（①のパターン）（宮本百合子『生産文学の問題』）

- (23) 彼等は強盗をしない、小細工をしない、見かけは鬼のようであって、実は淡泊にして、親切にして、且つ苦勞人であって、同情ということを知っているが、決してそれを押売りはしない。

(②のパターン) (中里介山『大菩薩峠 33 不破の関の巻』)

- (24) (前略) これもわかりきったことのようにあつてしばしば忘れがちなことであり、そうして忘れてならないことの一つであらうと思われる。

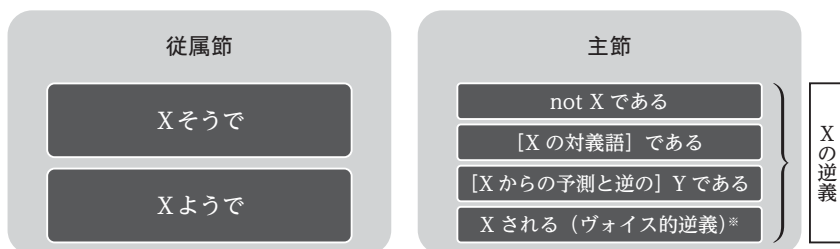
(③のパターン) (寺田寅彦『科学者とあたま』)

確かに、ヨウデアッテは意味・機能的にヨウデと重なりが見られるため、ヨウデをヨウデアッテの短縮形と考えることは可能である。しかし、本稿執筆者の内省ではヨウデアッテで逆接の意味関係を表示するのは据わりが悪いと感じ、なおかつヨウデと比べると(ヨウデの逆接用法は176件確認され、ヨウデアッテの20倍ほどである)用いられにくい表現形式であるという印象はぬぐえないため、全くの同一視は避けたいと考える。

6. おわりに

以上、「そうで」と「ように」、およびそれらの派生的接続形式について見てきた。本稿の指摘は、以下の図表と簡条書きにまとめられる。

表2:「そうで」「ように」の逆接用法のパターンまとめ



※ヨウデ類のみ。

- ①「そうで」「ように」が逆接を表し得ることを、従来の指摘よりも具体的、かつ詳細に分析した。
- ②「ように」の逆接用法に関する最初の指摘としては、管見の限り、現時点では、白石大二編(1984)『新文章辞典』のみが挙げられる。
- ③「そうで」「ように」の逆接用法では、「[そう／ように]でいて」のようにテイテ形式をとったり、副詞「実は」「なかなか」などが共起したりすることによって、逆接の関係がより明確になり、テイテ形式をとれば逆接しか表さなくなる。

- ④「そうであって」は例が僅少であるため、一般的な表現とは言いにくい、「ようにあって」にはある程度の用例もみられ普通の表現と見なし得る。
- ⑤前掲の表を箇条書きにすると、「そうで」には3パターン、「ように」には「そうで」と同様のパターンと、従属節と主節とでヴォイスが異なるパターンを加えて、合計4パターンがある。

「そうで」類

- a. 「X そうで not X である」あるいは「not X そうで X である」
- b. 「X そうで [X の対義語] である」
- c. 「X そうで Y である」

「ように」類

- a. 「X ようで not X である」あるいは「not X ようで X である」
- b. 「X ようで [X の対義語] である」
- c. 「X ようで Y である」
- d. 「X するように X される」あるいは「X されるように X する」

以上を本稿のまとめとし、逆接を表す表現形式として「そうで」「ように」を提示した。

逆接を表すテ形接続の残された課題としては、「ておいて」「(に) 見えて」「てなお」のような複合辞的な接続形式での逆接用法、また、古代日本語における逆接用法の「て」に関する記述的研究、単純な継起接続であった「て」が、逆接の文脈で用いられるまでの構文史的意味研究がある。それらについては、別稿を予定している。

注

- 1) 拙稿では、①《偽装》型（《知らんふり》型）、②《敢行》型、③《意外性》型という3つの文型を意味的・構文的に取り出した。なお、①と②は意味的に截然と分かたれ切れているとは言い難い面があるが、構文的には明確に異なっている。
- 2) 日本語教育界では活用形の一種として「テ形」「てフォーム」と呼ばれることも多い。
- 3) 助詞「て」の逆接用法に関しては、拙稿（参考文献参照）で取り扱った。
- 4) 「そうで」類はいつでも逆接として接続するわけではない。「ように」類も同様。
- 5) <http://www.let.osaka-u.ac.jp/~tanomura/kwic/aozora/>。2015年11月20日に最終検索。
- 6) 助動詞という品詞を立てない立場であれば、否定形を表す形態素（活用形の一種）と捉えられる。
- 7) <http://www.kotonoha.gr.jp/shonagon/>。2015年11月20日に最終検索。

- 8) <http://database.asahi.com/library2/main/start.php>。2015 年 12 月 14 日に最終検索。
- 9) https://dbs.g-search.or.jp/WMAI/PCU/WMAI_ipcu_menu.html。2015 年 12 月 14 日に最終検索。
- 10) <https://database.yomiuri.co.jp/rekishikan/>。2015 年 12 月 14 日に最終検索。
- 11) 「X されるようで X する」構文パターンは本稿執筆者の内省による判断であり、まだ事例は見出せていない。

【参考文献】

- 石黒圭 (1999) 「逆接の基本的性格と表現価値」『国語学』198, pp.129-114
- 泉原省二 (2007) 『日本語類義表現使い分け辞典』(研究社)
- 江口匠 (2014) 『接続表現の歴史的研究』学習院大学卒業論文 (指導・安部清哉教授)
- 江口匠 (2016 予定・校正中) 「〈逆接〉を表す『て』をめぐって」『人文』14 (印刷中、3 月刊行予定)
- 大堀壽夫 (2012) 「従属句の類型を再考する」シンポジウム「複文構文の意味の研究」言語学研究会・構文論グループ (1989a) 「なかどめ——動詞の第二なかどめのばあい——」『ことばの科学 2』(むぎ書房)
- 言語学研究会・構文論グループ (1989b) 「なかどめ——動詞の第一なかどめのばあい——」『ことばの科学 2』(むぎ書房)
- 小池清治・小林賢次・細川英雄・山口佳也 (編) (2002) 『日本語表現・文型事典』(朝倉書店)
- 国語学会編 (1980) 『国語学大辞典』(東京堂出版)
- 坂原茂 (1985) 『日常言語の推論』(東京大学出版会)
- 佐藤武義・前田富祺他編 (2014) 『日本語大事典』(朝倉書店)
- 白石大二編 (1984) 『新文章辞典』(ぎょうせい)
- 鈴木重幸 (1972) 『日本語文法・形態論』(むぎ書房)
- 田窪行則 (1987) 「統語構造と文脈情報」『日本語学』6-5, pp.37-48
- 中村明他 (2011) 『日本語文章・文体・表現事典』(朝倉書店)
- 仁田義雄 (1995) 「シテ形接続をめぐって」仁田義雄 (編) 『複文の研究 (上)』(くろしお出版) 所収, pp.87-126, 仁田義雄 (2010) 『日本語文法の記述的研究を求めて』(ひつじ書房) 再録, pp.233-270
- 日本語記述文法研究会編 (2008) 『現代日本語文法 6 第 11 部複文』(くろしお出版)
- 日本語記述文法研究会編 (2010) 『現代日本語文法 1 第 1 部総論 第 2 部形態論 総索引』(くろしお出版)
- 日本語教育学会編 (2005) 『新版 日本語教育事典』(大修館書店)
- 日本語文法学会 (編) (2014) 『日本語文法事典』(大修館書店)

- 松村明編（1971）『日本文法大辞典』（明治書院）
南不二男（1974）『現代日本語の構造』（大修館書店）
南不二男（1993）『現代日本語文法の輪郭』（大修館書店）
森田良行（1989）『基礎日本語辞典』（角川書店）
森田良行（2007）『助詞・助動詞の辞典』（東京堂出版）
山口明穂編（2001）『日本語文法大辞典』（明治書院）

【付記】

本稿は、拙稿（江口 2016 予定稿。参考文献参照）にて触れ残した問題の 1 つを取り上げたものであり、学習院大学大学院の日本語学演習（安部清哉教授）の予備時間において、個別研究として発表させていただいたものをもとにしている。指導教授の安部先生には、発表および稿を成す過程で上記前稿同様、論理や表現を整理するなどご指導していただいた。深謝いたします。

（えぐち・たくみ 博士前期課程）